

23	幸田	南部中学校	ハラダ ユウキ 原田裕希
----	----	-------	-----------------

分科会番号	21	分科会名	「特別の教科道徳」特別分科会
-------	----	------	----------------

## 研究題目

他者を理解しようとし、他者とよりよく関わろうとする生徒の育成

－ 互いのよさや違いを認め合う学習活動を通して －

### 1 はじめに

子どもたちを取り巻く世界は、グローバル化の進展やSNSの急速な普及などかつてないスピードで大きく変化してきている。このような中で、子どもたちのコミュニケーションや人間関係に関する変化への対応は、個々の家庭に任せるだけの問題ではなくなっている。そのような中で、小学校では平成30年度、中学校では令和元年度から道徳は「特別の教科道徳」となった。新学習指導要領では、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことが目標とされ、いわゆる「考える道徳」「議論する道徳」への転換が求められ5年が経過している。

また、幸田町は令和4・5年度と2年間にわたり、愛知県教育委員会より人権教育の研究委嘱を受けた。同和問題をはじめ、女性、子ども、高齢者、障がい者、外国人、感染症患者、ホームレス等に対する差別的な扱いをなくすために、人権教育の必要性や重要性が叫ばれてきた。しかし、時代の流れとともに変化してきた社会構造や多種多様な考えの広まりの中、SNSの普及により、LGBTQ、犯罪被害者、犯罪加害者、その家族への誹謗中傷がエスカレートするなどの課題を抱えるようになり、これまで以上に人権教育の在り方を考えなければならないと認識している。

人権教育の根幹でもある、自己理解と他者理解をベースに、相手のよさ、自分との違いを認めるとともに、相手のことを思い、温かく、豊かな人間関係を作ることができるようになってほしいという強い願いをもっている。そこで本研究では、研究テーマを「他者を理解しようとし、他者とよりよく関わろうとする生徒の育成」とする。

## (1) 研究計画

### ① 研究のねらい

本校は、地域のかたをお招きして年に4回交流会を行うなど、地域との交流が多い学校である。そこで地域全体と関わる中で、素直で温かみがある生徒が育まれると考えた。また、一学年2～3学級の規模であり、幼少期から互いのことをわかっている生徒は多い。



【写真1 第4回 お礼の会の様子】

他の小学校を卒業した仲間のことを理解するのにも、多くの時間を必要とせず、仲間づくりがしやすい環境にある。しかし、中学生という時期は、生徒それぞれの価値観やものの考え方などが多岐に渡るようになり、これまでの関わり方ではうまくいかないことも出てくる。また新しい友人関係を築こうとしても、相手のことを理解できずに悩んだり気づかないうちに仲間を傷つけたりするような言動で関係を悪くしたりする生徒の姿も少なくない。

自分の価値観を押しつけがちな時期であるが、相手のことをよく知り、その人のことを理解し認め、時には励ますことができるようになれば、より温かい人間関係を築いていくことができると考えた。

### ② 目ざす生徒像

ア 研究テーマに迫るために、道徳教育における目ざす生徒像を次のように設定した。

- ・互いのよさや違いを認め合い、他者を理解しようとする生徒
- ・相手の立場を尊重し、他者とよりよく関わろうとする生徒

### ③ 仮説

イ 目ざす生徒像に迫るために、次のように仮説を設定した。

- ・外部講師や異年齢との交流を図る活動を充実させれば、日ごろ関わらない人のことを考えた接し方を学び、またいろいろな考え方に触れることができ、他者を理解しようとすることができるだろう。
- ・道徳で「友情」、「信頼」や「相互理解」、「寛容」の価値項目を中心に授業構想を練れば、仲間を認め合うことについて深く考えるようになり、よりよい人間関係を築こうとする気持ちを高めることができるだろう。

### ④ 手だて

ウ 本校の行事を生かし、実践として次のような実践を行った。

南部中学校行事 「交流会活動」

「友情」、「信頼」、「相互理解」、「寛容」に関する、道徳の授業実践

## (2) 実践

### ① 交流会活動（5・6・9・10月）

本校ではこれまで、地域のかたを講師としてお迎えし、交流会活動を行ってきた（写真1）。生徒は毎年、複数の講座から一つ選択し、年間4回の活動を通して技能を身につけたり、仲間と協力することの大切さを学んだりする機会としている。進級しても同じ講座を選んで技能の向上を目指す生徒や、毎年異なった講座を選択していろいろな知識を身につけようとする生徒などさまざまで、交流会活動を楽しみにしている。一方、講師の方々も、新しく講座に参加する生徒、継続して取り組む生徒のどちらも意欲的に参加できるよう、工夫された活動内容を展開している。本校の伝統行事の一つとして位置づけられている。前年度は、年間3回の実施であったが、新型コロナウイルスに関わる制限の緩和により、今年度は、コロナ以前のように5月、6月、9月、10月の年間4回実施するものとし、以下の講座を計画した。

ゲートボール、ちぎり絵、ハンドクラフト、華道、茶道、手話、将棋  
和太鼓、凧作り、着付け（和装）、陶芸、障がい者スポーツ

各講座は、学年の別なく選択することができ、生徒は講師のかたや他の参加者の所作や作品を見ることができる。講師のかたとの交流の中で、手本を示され、専門的な知識を伝授される。茶道では、作法や所作に加え、おもてなしの心を学ぶことができた。また、ゲートボールや和太鼓では、地域の人との交流だけでなく、学年の垣根を越えた仲間との連携の大切さを学ぶことができた。会を重ねるごとに上達し、うまくできたという成功体験を積み、さらに上達したいという意欲が高まった生徒が多数いた。陶芸に参加したA子は、「あまり関わることの少ない他学年の子とも話せて、どんな

作品を作ろうか話したり、学校生活のことについて話したりすることができた」（資料1）という記述から交流会を通し、良好な人間関係を築こうとする気持ちを高められたと考えられる。初めての陶芸体験でわからないことばかりで緊張し、不安なことがたくさんあって困っていたが、同学年の人をはじめ、他学年の人や講師のかたがたとの交

★第4回を終えて♪  
視点：講師の方や他学年の人とのかわり、講座で学んだこと  
今回の交流会では、講師の方とのかわり、他学年とのかわりを感じました。講師の先生に分からないことを聞き、教えてもらったりしました。そして、いつもあまり関わることの少ない他学年の子とも話せて、どんな作品をつくらうか話したり、学校生活のことについてや日常生活のことまで話せるようになりました。

【資料1 A子の振り返り】



【写真2 陶芸体験の様子】

流を通し、相談しながら安心して楽しく作業を進められたことが伺える。

作業中は、講師のかたが、生徒の作業の進行状況を見ながら、目の前で手本を見せて指導していく。その様子を見たり、アドバイスを受けてりしながら作業を続け、作品を完成させることができた。外部講師や異年齢との交流を図る活動を通し、日ごろ関わらない人のことを考えた接し方を学ぶことで、A子を含むたくさんの生徒が、仲間との関わり方に生かすことができ、協働作業を通し、他者とよりよく関わろうとすることができた（写真2）。

## ② 「友情」、「信頼」についての道徳の授業実践（10月・2年「泣いた赤おに」）

### ア 生徒の実態

本学級の生徒に学級の特徴を聞くと、「元気のよいところ」、「学級全体で笑い合えるところ」という長所があがった。しかし、実際は、仲のよい生徒たち同士での会話は多くあるが、異性との交流があまりない。自分の思っていることを口に出したり、行動に移したりできる生徒が少ないことも挙げられる。また、自分の思い通りにならないことがあると不満を直接相手には伝えず、教師に訴えてくる。生徒たちには、学級の仲間との交流を多くもち、意見を言い合える関係を目指してほしい。他者を尊重する気持ちをもち、相手を信じて本音を言える関係を目指し、これからの学校生活を過ごしてほしいという思いから、実践することにした。

### イ 資料について

資料は、赤おにと青おにの友情を描いた物語である。赤おには人間と仲よくなりたいのに怖がられてしまい、やるせない思いでいた。そこで友達の青おにが、赤おにと人間が仲よくなるような計画を実行し、その計画が成功する。しかし、青おには、計画が露見しないように遠くへ去り、それを知った赤おにが涙を流す場面から「友達」とはどのようなものかを考えさせる。

本資料を通して、赤おにや青おにのとった行動から「友達」とはどんな人のことか、「友達」であれば、自分自身として今後どのような行動をとるのかを考えるきっかけになればよいと考える。生徒たちがこれからの学校生活において、相手を尊重しながら生活や学習ができる集団に育つだろうと考えた。

### ウ 授業の様子

授業の導入に、「友達」とは、どんな人のことかについてワークシートに自身の考えを記入させた。B子は、「悩み事を相談したり、頼れる人」と記述した「あまり仲よくない人には、自分のことについてあまり話さないと思う」という理由であった（資料2）。



【写真3 心の数直線上にネームプレートを貼る様子】



た。

本時の振り返りでは、G子は「青おにの提案に赤おには、ただ従っただけのように見えたので、友達を作るときも同じで素直に自分の考えや、気持ちを伝えられる関係であれば友達といえると思った」と、自分の考えを相手に伝えられる関係が大切だと振り返った。C男は「最初は友達といえる側だったけれど、青おにが離れてしまったり、赤おにが泣いていたりするところから、友達とはいえない側に気持ちが変わった」「ずるがしこく頭を使ってしまったから、青おにと赤おにの関係が崩れてしまったと思った」と、お互いの思いにすれ違いが生じ

今日の授業の振り返りを書きましょう。  
木Aは「友達」は信頼できる人のことだと思ったけど、物語を通して、青おには赤おにのことを信頼していて、人間の友達ができたあとでも友達として話してくれると思っていたけど、赤おにが離れていってしまったから、青おにとは違う関係性だと思いました。赤おにと青おには互いに信頼しあえていなかったから本当の友達とはいえないと思いました。

### 【資料5 H子の振り返り】

ると友達という関係性が崩れてしまうと振り返った。また、H子の振り返りでは「物語を通して、青おには赤おにのことを信頼していて、人間の友達ができたあとでも友達として話してくれると思っていたけれど、赤おにが離れていってしまったから（青おにが）遠くへ行ってしまった」「赤おにと青おには互いに信頼しあえていなかったから本当の友達とはいえない」と記述しており、相手に信頼する気持ちが大切であるという考えをもつことができた（資料5）。

### (3) 研究の成果と課題

外部講師や異年齢との交流を図る活動（交流会）を通して、相手を尊重する気持ちを大切にしながら各講座に取り組むことができた。また、生徒や外部講師と日常生活のことを話しながら活動をすることで、さまざまな考えに触れ、楽しく講座に参加することができた。しかし、4回の講座を通して、異年齢との交流を図ることができたが、この経験を生かす場がないため、学校内で学年を超えた縦割りの活動を増やすべきだと考えた。

また道徳の授業では、資料を通して、他者の立場に立って物事を考えることができた生徒が多数いた。子どもの実態に合わせた授業構想や主体的に学ぶことのできる資料の活用、問題解決的な学習を取り入れたことにより、子どもが自分自身のこととしてとらえ、自ら考えようとする資料に出会い、子どもが自己を見つめ、主体的に学ぶことができたと考えられた。今後は、教科横断的に取り組み、1回の授業や道徳の授業だけに関わらず「一人一人が大切にされる授業」や「互いのよさや可能性を認め合える仲間」が増えるような、教育活動を展開していく必要があると感じた。